

教会堂を建てる —— 会堂は、一つの町の中に立ち続け、なにかを語りつづける  
2024/11/18 湘南教会長老 宇都木伸

1. はじめに

2. 会堂新築に至った、おおよその経緯(説明) (3頁の年表参照)

A. 新会堂建築に至った経緯

- (1)年表Ⅰ 会堂建築前史
- (2)年表Ⅱ 新築に至る経緯 左欄
- (3)2020/7/16 屋根モルタルの崩落事件 ⇒ 「建築検討委員会」設置 ⇒ 新築方針
- (4)2021/1/24 「建築委員会」
- (5)2021/4/25 建築献金予約
- (6)2021/7/25 プロポーザルの会 ⇒ 設計監理者決定 ⇒ 設計図
- (7)2022/3/5 建築業者の公募・選定 ⇒ 建築契約
- (8)2022/7/24 旧会堂解体 ⇒ YWCA 会館における礼拝
- (9)2022/11/20 棟上げ感謝会
- (10)2023/5/14 新会堂における最初の礼拝 ⇒ 9/24 献堂式

B. 思いがけない大きな障碍 しかも二つ

- (1)新型コロナウイルス(COVID19)の発生/継続 ⇒ 厳しい集会制限
- (2)ロシアのウクライナ侵攻 ⇒ 建築資材等の暴騰

3. いくつかの印象深い体験——発題に代えて

I 会堂新築へ心を一つにするまで

三種類の意見 ⇒ 相互理解の進む有益な過程であった  
焦点は、会員減少と高齢化の中で、献金が足りるのか、という不安。

A. 新築反対派…教会から少し離れていた若い人たちの中から

現代社会の一般的な考え方

B. 合理的堅実派…若い教会人の中から

現有の積立金の倍額程度で収める「小さな教会案」

現状認識・責任・安全という、理性的視点とその積み重ね。

C. まぼろし追求派…

夢と願望：願望は私の内から出て来る願いであり、夢は外から与えられる幻。

具体像は描けない。安全性の確保もあり得ない。

主に身を委ねて、歩み出そう

◎現実起こったことは、夢をも凌ぐものだった。茅ヶ崎東教会の長老の言。

踏み出さなければ、決して得られなかったであろう恵み「強いられた恩寵」

「もっとも注意すべきことは、我々は貧しいから、ここまでしかできませんでした、という、いわば貧しさが「欠け」となって現れるような建物」

◎萎えた足を癒やされた男を目の前にして、サンヘドリンは沈黙した(言行録 4:14)。

## II 会堂というものの意味の再考。

### A. 先達から私たちへ、そしてまた、私たちから将来の世代へ

- ・ “将来の信徒への贈り物”であることは一致
- ・ それは free gift として、との願

### B. 地域への贈り物

- ・ 同じ通行者が、毎日教会を、見詰めながら歩いて通る
- ・ 安らぎと平安の場として機能し、掲示聖句は読まれ、パンフレットはなくなる
- ・ 私たちの生きている証しそれ自体の提供。
- ・ 思いがけない角度から、思いがけないところに、目が注がれている。

### C. その贈り物は、送り主を自ずと現す。

「完成して姿を現す会堂は、自ずから、これを建てた教会エクレジアが、いかなる教会かを、表現する。」

こちらが「見せようとするもの」、でないものが実はみつめられている。

## III 会堂の内側で

### ①物理的な静寂さから

### ②「なにかを一心に待っている静寂さ」

「聖なる虚空間として教会堂は、つねに満たされるときを待つ」

### ③そして、それは到来する。

⇒ 礼拝の活動性の中にあふれ出す。

- ・ 静寂性を保つ会堂、そしてまた、活動性を励ます会堂
- ・ 講壇を取り囲む扇型の座席は、一つになる響。

## IV 普請中の不思議な感覚

### A. 教会が、社会の中に頭から突っ込んでいる、という感覚

「会堂の中に腰を据えて外を観る感覚」と正反対、の感覚。

昔時の、「路傍伝道」を思い出した。

### B. 「天と地と『海』を作られた神」(言行録4:24)。ペリシテ人支配の地のさきに。

自分のテリトリーガリラヤの地から外へ出て行く勇気。

⇒ 「大胆にかたる」の意味。

「萎えた足を癒やされた 40 過ぎの男」である自分を証人として

「こんなにも貧しかった私たちの教会が、豊かに祝福されて・・・。

### C. 遠近諸教会・伝道所の祈りとご支援の体験。

日本キリスト教会の一員であること

諸教会、とりわけ伝道所からのご支援は、忘れがたい感謝であった。

## 4. まとまらないままに